

新刊紹介

Harold P. Cooke:

Osiris: A Study in Myths,
Mysteries and Religion,

London, 1931.

本書のサブ・タイトルによつて、こゝに取扱れてゐる内容は、よりよく察知せらるゝであらうが、埃及、フェニキヤ、希臘の神話や秘義、特に埃及古代の宗教的觀念に就いての研究が爲されてゐる。著者の暗示する所によればオシリスの神話には三つの意味がありうる。其の第一は、埃及が年々ナイル河の氾濫を蒙る事を譬喩的に表したものであるとするが、この解釋は「永く興味を引く事を得ず、又プルタークの記錄に見ゆるものを説明するに充分でない」として著者はこれを退けてゐる。第二は天文學的解釋であつて、これには著者が多く、注意と努力を拂ひ、神話學、天文學、及び古代史の諸權威に依つてその證據づけが試みられてゐる。第三は宗教的のそれであつて、こゝではオシリスとイシスは一つの創造せられざる神性の、主要なる二つの第一義的様相であるとせられてゐる。オシリスの神話の多面性については、一々明かなる批判は試みられてゐないが、著

者の力點は第二の天文學的解釋におかれてゐる。天文學的事實を先づ考慮に入るゝに非ざればこれらの神話の取扱ひの成功は期し難い事を主張して、オシリスは元來太陽であり、イシスは月であるとする。此の點で、フレーザーの、オシリスを夏熱に焦さるゝ草木神とする説に反對せんとする意向が見える。然し古代に於ける農業と天體觀測の密接なる關係ある事を考ふれば兩者の説の同時成立も考へられぬではないが、これはともかくとして簡潔に要領を得た、埃及の宗教觀念の解説としては注目に値する。(Y)

Melline d'Asbeck:

La Mystique de Ruysbroeck

l'Admirable. Paris, 1930.

フランドルの神祕家に就いて書かれたものは少い。今までの所では、ウオーチエの「ルイスブルック・ラドミラブル」(一九二三年出)が特に注意を惹いてゐた。そこで今この書の出版に心を動かされて手にして見れば、先づ序文に於ける著者の、神祕經驗に對する理解が述べられてゐる、そしてその理解の健全さに先づ以つて安心する。内容は、ルイスブルックの(本名は知られず、生地の名がそのまゝ、名として傳へられてゐる)の時代その生涯、その體系と歴史的先驅者、及びその神祕的著作となつてゐる。全篇を通じて經驗面の表出に力を注ぐと云ふよりはむしろ彼の經驗構成の及び著作中の傳統的要素に詳細なる注意

が拂はれてゐて、ニオ・プラトニスムの脈絡を彼に見てゐる。マイスター・エックハルトの影響を力説してゐる點は興味深く、彼の經驗を可能ならしめた資源の探究に於いて、前記のウオーチエの著作に可成辛辣な批判が加へられてゐる點は新たに注意をひく、(一〇七—一二)教へらるゝ所のある優れた著作である事を喜ぶ、只惜むらくは、二三頁ほど印刷上の不注意の爲讀まれぬことである。(Y)

Henri Bremond:

Bosuet, Maître d'Oraison.

Paris, 1931.

本書は元、「放棄」の教義を説けるがために名あるジャン・ピエール・ツ・コーサッドが、一七四一年に出版したもので、原名は“Instructions spirituelles en forme de dialogue sur les divers états d'oraison, d'après la doctrine de M. Bossuet, évêque de Meaux.”となつてゐる。本書の内容は二部に分たれてゐて、第一部は著者の時代の靜寂主義を中心とする論義を取扱ひ、第二部は神祕神學に於ける「祈念」の問題をボスエ自身の精神に於いて、尙又その用語を借りて説明し、その實踐教導法を明にせんとしたものである。此の第二部のみは時折獨立に翻刻せられ、第一部はその内容の論義的なるが爲に切離されてゐた。それが今度アルモンの手によつて完全な形で出版せられたのである、而してアルモンは一八九二年及び一八九五年にアセノの

出したものによつて翻刻し、上記の題目を冠せしめたのである。本書の重要な點は、これが歴史的であると共に、教義の説明が加へられてゐることにある。原著者の「魂の放棄」なる書簡集によつて見るならば、當時の論義が彼の魂に如何に苦き印象を與へてゐるかがわかる。彼の確信してゐた事は、當時の論義の中心となつてゐた問題は、祈念の意味を眞に解する事なくして只單に、その實修の方法論を過大視してゐた所にあつたと云ふのである。教徒の指導的位置にあつた者が、殆んど凡べて方法を目的自體かの如くに考へてゐた。そこで彼は必要に逼られて筆をとり、方法の多様も究極は同一の目的に導くものであり、一派の所謂獨自性の偏執に基く主張の底には多分の一致點の見出せることを示して、大體のところ、ボスエの教義を指導標とし取捨と綜合を爲し、質疑、應答、對話の形式で述べてゐる。而もその目的は、論義の諸相を通じて何れも根本的には共通點のありうる事を明にせんとするにある。編者アルモンも亦此の著作に於いて、ボスエとフエネロンの調和を圖らんとする試みのある事を見てゐる。全體を通じて「自己放棄」、服従、神に生きが爲に自己に死ぬ、神の現前に於ける信仰と永住、等の過程が、「上昇の過程」よりも重んぜられてゐるのが特徴である。然しながら、修業實踐と、實生活に關する行道實踐とに就いて不健全な判斷を有したキエチスムの缺陷には尙多くの考ふべき問題がある、この點には深く觸れてはゐない、が貴重な文献である事には疑はない。(Y)